

断想だより

2024年12月22日発行

第32号

発行人 本多 謙



人生を祝福する

すっかり冬になりました。淋しくなった梢を見上げ散り敷く落ち葉を踏みしめながら公園を歩くと、あの華やいだ秋が終ったことが心に沁みます。いつから冬になったのだらうと回想します。蟬の声が去り、

^{すだ}虫が集く音が消え、枯葉の絨毯が敷き詰められた頃からでしょうか？季節は移ろいやがて春が来ることは分かっていますから、その期待を胸に暗い寒い日々を過ごすことになりましょうか。一年の最も暗い日をイエス・キリストの誕生日にしたのは古代のクリスチャンの知恵でしょうか。人々は救い主の誕生を祝福して暗い毎日を耐え過ごそうとしますが、このお便りでは「人生を祝福する」という断想を読んで、老いを身近に感じる様になった自分の人生を祝福する事の意味をご一緒に考えてみましょう。



いやなことをされると、腹を立て仕返しをしてやろうと思います。立場が逆になると、相手も同じことを考えるでしょう。人間の生活

^{むく}というものは、たしかに、報い合いながら展開してゆくものであります。しかし、だからといって、報い合いの構造から脱しようともせず、その循環の中を生きることを当然とするのは、人生をみずから卑しめることでありましょう。むしろ、報い合いの構造から離れて、相手の気持ちに支配されず、自分自身の感情に流されない、自由な立場を求めて生きて、人生を祝福したいものであります。

職場でも学校でも家庭でも、誰かと一緒にいれば何につけても腹の立つことはあるものです。学園ドラマやホームドラマにありがちな、意地悪されたので意地返し返すという話しはありがちです。私の小学校時代にも、教科書を隠すとか、ランドセルを学校のゴミ箱に捨てるとかのいやがらせはありました。いやがらせをされたら仕返しをしてやりたいという

^{いっしむく}気持ちに駆られます。せめて一矢報いたいという気持ちになります。しかし、自分がそういう気持ちになるということは、立場を替えて自分が相手に報いたら報わ

れた、つまりいやなことをされた相手も自分と同じく自分に報復したいという気持ちになるということになります。この様な報復の循環を断想では「人間の生活というものは、たしかに、^{むく}報い合いながら展開してゆくものであります。」と表現しています。

この様に私達が互いに生き合う事実を認めた上で、断想は読者に一つの気付きを与えます。それは「しかし、だからといって、報い合いの構造から脱しようともせず、その循環の中を生きることを当然とするのは、人生をみずから卑しめることでありましょう。」と、人生を生きる視点を一段上げることがを提案しています。報復し合う構図は家庭でも職場でもどこにも見られます。現代パレスチナでもそうです。文学では、ロミオとジュリエットの悲劇が挙げられます。この悲劇はモンタギュー家とキャピュレット家の報い合いの構図から生まれたのでした。報い合いの循環の中を生きることを当然とする両家の者にとって、若い二人の悲劇が起らなければ報復の構図から抜け出すことはできなかったに違いありません。断想の作者は読者に、読者が「人生をみずから卑しめること」をしている事に気付きなさいと教えています。^{むく}報い合うだけの人生は卑しい人生ですよ、と教えています。

ではどう人生を生きたら良いのか。仏教ではこういう心の地獄から抜け出す方法を“執着を絶て”と教えているようです。この断想では続く最後の長い文でそれが提示されています。「むしろ、報い合いの構造か

ら離れて、相手の気持に支配されず、自分自身の感情に流されない、自由な立場を求めて生きて、人生を祝福したいものであります。」とあります。この通りに生きられたらどんなに良いだろうと思います。最後の「したいものであります。」という言葉遣いには、断想の作者も理想の通り生きることができ切っていない姿が^{ほの}仄見えます。読者と同じ立場に立って「そういう風に生きてお互い人生を祝福したいものだよね」と語りかけている感じがします。

何かに支配され、自由な立場で生きられない人生は祝福すべき人生ではありません。自由な立場で生きるには「相手の気持に支配されず、自分自身の感情に流されない」必要があります。その為には自分自身の心と立場を認識する視座の位置を高くして自分が置かれた状況を俯瞰できるようになる必要があります。その為には「報い合いの構造から離れ」る必要がある、ということなのです。「離れる」のは物理的な距離をとることでも、一人静かに自分と自分の周囲の人との関係を見詰め直してみる、という事でも良いでしょう。

この断想で述べている論理はずいぶんスッキリと纏まっているなと感じます。250文字という制限があるからでしょうが、整理し過ぎではありませんか、と言いたくなります。人々が人生を生きる状況とはもっと複雑で多様だからです。なので、断想の作者が盛り込めなかった事を少々私なりに加えてみたいと思います。

「いやなこと」をされてもその程度が些細な事ならば、無視してやり過ごすのも、虐めた相手との距離を置くことによって心の傷を癒すのも、人生を生きる知恵でしょう。そうすれば神様に、あの人の弱さから来る罪を許してあげて下さいとお祈りする余裕もできるでしょう。

ですが、「いやなこと」が自分の出生に因るものだったら事態は深刻です。旧約聖書世記4章にアダムとイブの子供たち、兄カインと弟アベルの話しがあります。ある日カインは穀物を、アベルは羊の初子を神に捧げたが、神はアベルの供物を認めカインの供物は認めなかったので、嫉妬したカインはアベルを秘かに殺したという話です。創世記に何故兄弟殺しの様な残酷な話が載っているのか不思議で、周囲の誰もその理由を知りませんでした。アダムとイブの話は人間が生まれて異性を意識するまでの心の成長を描いた話だと教わった記憶があります。それを敷衍するならば、カインとアベルの話は親の庇護の下で子供たちが成長し成人するまでの葛藤を描いたものだと言えます。ですから、このエピソードは「神」を「親」と読み替えると現実感が増します。幼少期は親と子の関係が主ですが、少年期は同年代の子供との関係が重要になります。子は親に愛されなければ生きて行けません。子供が何人もいる家庭では他の兄弟姉妹より多く親に愛されようと競争が起ります。子供は親に愛されていないと思えば酷く傷付き、親に愛されようと必死に

なるのです。特に男（雄）の場合、他の男と競って勝とう、一番になろう、自分の王国を作ろうというのが性^{さが}ですから、男兄弟は大抵仲が悪いのです。カインは親に愛されず認められずアベルに負けたことを悟って傷付いたことが何度もあったことでしょう。親にしても可愛い子とそうでない子では扱いは自然に異なります。それが積もり積もって、ついには弟を殺してしまうのです。親に庇護されている年少のカインはどんなに傷付いても親の前ではアベルとの良い関係を演じるしかなかったのでしょう。ですからカインは親から詰問されても知らないふりをしたのです。

この「断想」を著した藤木正三牧師は娘が数人生まれた後に、待ちに待った嫡男として生まれました。実家は大邸宅でした。嫡男として大切に育てられましたが、続いて生まれたのも男子でした。藤木少年は親の期待に応えることが出来ず、家業を継いだのは結局弟でした。当然、この長男と次男の間には「いやなこと」を応酬するような葛藤があっただろうと思います。幸か不幸か藤木少年は事業家には生れ付いていなかったようで、全く違う牧師という職業に就くことで「報い合いの構造から離れ」た人生をおくられたのでしょう。



私の知っているある婦人は地方の富家の四女に生まれ、親に認められたい一心で学業などに打ち込みましたが結局故郷を離れ、東京近郊の教会に尽くす人生をおくられました。封建色の強い地方の家の四番目の娘がどんな育ちかたをしたか？恐らく誰にも相手にされず可愛がられなかったのではないのでしょうか？その様な女の子は生き残る為に親に気に入られ親の気を引こうとして育ち、それが後々も続いたのではないのでしょうか？この婦人の人生が祝福されたものであることを祈ります。

私の知っている人で、兄よりも親に愛されたかった弟が父親に嘘の約束をして父親の遺産を全て譲り受ける公正遺言証書を書かせ、それを父親が死ぬまで兄姉に秘匿し、父親が死んでからそれを開示したという人が居ます。その遺言の保証人になったのは父親と特殊な関係が続けた弟の義母だったというおまけ付でした。兄はその葛藤で死にかけ、心臓を手術し、起業した会社を手放さざるをえなくなりました。兄はこの物語全体の構図を理解していましたが、兄がどんな言葉をかけても弟には届きませんでした。この様な「いやなこと」をされた側の人生が祝福されるにはどうしたら良いのでしょうか？

これら以外にも、尽くした人に裏切られた、築いて来た家庭を壊された、騙されて破産した、の様な話しは世間にはいくらでもあります。生れと育ちの違いから傷付い

て育ち、秘かに溜った鬱屈が何かを境に表に出て事件になることは、例えば親が死んだ後の遺産配分で良くあります。

思い出すのは息子を殺された母親の話です。彼女の息子はその友人に誤って殺され、犯人は捕まって死刑が決まりました。刑場に引き出され恐怖に^{おの}の息子と同年代の青年を見た母親はその青年を許し、死刑は中止になりました。これ程過酷な状況でなお「報い合いの構造から離れ」て犯人の命を救った母親の葛藤はどれ程だったろうと推測するばかりです。命を産んで育むという女性の本能に従ったのかも知れませんが、そうであったにしてもこの崇高な精神の女性の人生は神さまに祝福されたものになって欲しいものです。

今回のお便りはクリスマスには相応しくなかったかもしれません。

読者の皆様の人生が神さまに祝福されたものであることを祈ります。

了



発行人

ekyoukai は良い教会 [www.ekyoukai.org](http://ekyoukai.org)

本多 謙